
シュレディンガー

ドーナツ教開祖 安藤ナツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シュレディンガー

【Nコード】

N21830

【作者名】

ドーナツ教開祖 安藤ナツ

【あらすじ】

数字は人を絶望に追い込む。

確率は人に諦観を強制する。

降水率0%の日。この日に降る雨にこそ、尊敬に値する。

(前書き)

長編に、哲学的な彼女。
それにこの作品。

どれも自信作のつもりです。

高校受験を控えた岩明は、幼馴染の藤井に進められるがまま入れた参考書をレジに出した。こんなものを買ってももうすぐ死ぬから意味はないと岩明は思ったが、そのことを言うと藤井の機嫌を激しく損ねるので、黙って財布から一万円を出して、レジ打ちの三十男に渡す。

「よかつたね、均^{ひとこ}。この本屋に売ってて」

「俺の店にない本はないからな」

店主と思われるアロハの男は、自信満々にそう言い切る。確かに、小さな個人経営の店にしては、この本屋の品揃えは非常に良い。何故かいつでも欲しい本があるのだ。

岩明はこの本屋に何か自分と近いものを感じながら、お釣りを受け取る。一万円を出して千二百八十四円のおつり。正直、もうすぐいらなくなるとは言え、必要と思っていないものをこれだけ買うのは胸が痛い。

満足そうに紙袋に入った参考書を受け取る藤井の横顔を見ながら、岩明はため息をついた。

と同時に、

「ねえ、十円貸してくれない？」

鈴の音のような女の声に十円をたかられた。

声は後ろからで、いつの間にかそこには一人の魔女がいた。

長い艶のある黒髪に、漆黒の意思を含んだ瞳。革靴も靴下も黒色。ただし、凹凸の激しい身体を覆うのは純白のパーティードレスで、女

優のような顔は雪のように白い。すこし目つきがきつく、冷たそうな印象を受けるが十分に美女と言っても問題はなさそうだった。

「はあ、十円ですか」

そんな美女を前にしても、岩明は舞い上がることも緊張することもなく、露骨に面倒なことに巻き込まれたたと語る表情で言葉を返した。

「そ、十円。電話したいの」

「なんだよ、鈴音。^{りんね}電話ぐらい貸してやるぞ？」

会話に割り込んできたのは、レジ打ちの店主だった。どうやら顔見知りらしい。

「嫌よ。あんたに借りを作ると面倒なもの」

が、別に信頼し合う仲と言うわけでもないらしい。と言うより、一方的に店主が嫌われている気がする。

店主も鈴音の切り返しは予想していたらしく、大して気を悪くする風もなく笑っていた。

「いいじゃん。十円くらい。均、貸してあげようよ」

目を輝かせて、藤井がお釣りを持つ岩明の右手を揺らす。こっさり、「たぶん、モデルさんだよ。昔十円を貸したことがあるって自慢できるよ」と勝手な妄想までしていた。

そんな妄想は置いて、十円くらい確かに貸しても問題はない。そもそも、もうすぐ死ぬ自分してみれば金なんてあの世に持っていけないものを持っていても仕方がない。

「まあ、いいですけど」

「ありがと、岩明均君、藤井香奈ちゃん」

差し出された十円玉を受け取って、鈴音はそう微笑んだ。笑うと、眼つきの鋭さが消え、本当に女優としてテレビに出ていてもおかしくないように思えた。

が、それとは別なことに、二人は驚き、店主はにやにやとその様子を見ていた。

「え？　なんで私たちの名前を」

困惑する藤井をよそに、岩明は「やっぱりか」と呟いた。

「お姉さんも、超能力者？」

「あら、やっぱりあなたも？」

当たり前のようにそう言って、二人は笑った。

「ええ、ピンポイントな予知ができます。でも、初めて見たな、僕以外の能力者」

「案外その辺にいるものよ？」

「そうなんですか。まあ、ぼくにはあまり関係ないですけど。その十円は、出会った記念に差し上げます」

「あらそう？　でも、その必要はないわよ。しっかり万倍にして返すから」

「ああ、それは不可能ですよ」

和やかに超能力と言うものを前提に話を続ける二人の会話が、その一言で止まった。お互いにお互いを試すような、沈黙の後、岩明

が口を開く。

「だって、あなた三日後に死んじゃうじゃないですか」

「あら、本当に予知ができるのね。いいわ、だったら二日後の夕方、この店で会いましょう」

そう言うと、鈴音は踵を返して店からゆっくりと出て行った。堂々とした雰囲気を持った歩き方を見送った後、藤井が岩明を睨んで言う。

「初対面の人に失礼じゃない！ あの鈴音さん、シヨック受けてたよ！」

「それはないよ、あの人の力は、ぼくなんかじゃ遠く及ばない領域だよ」

そこまで言って、岩明達は店主の視線に気が付いた。カウンターの前で二人並んで話していたら営業妨害だろう。二人は店主に頭を下げてから慌てて店を出る。その時すれ違いに店に入って来た制服姿の女子高生が、二人の顔を見て驚いた顔をしていた。「お客が来る」と言っていたがどう言う意味であろうか？

日の暮れ始めた商店街を歩きながら、岩明は先程の話の続きを切り出した。

「それに、知っていることはどうしても自慢したくなっちゃうものでしょ？ それを我慢するなんて、ぼくには不可能だよ。香奈だつて、知ってるからこそ、必要もないのにぼくに勉強を教えようとする」

「勉強は必要よ。あんた、もう受験生なのよ？ それなのに勉強もせずによくわからない本ばっか読んで」

「本なんてどれもこれも良くわからないことしか書いてないさ。わ

かるんだったら、それは知っていることが書いてあるだけだよ」

それに、と岩明は繋ぐ。

「ぼくは、もうすぐ死んじゃうからね」

そう、岩明はもうすぐ、後二週間もしない内に死ぬ。大型のダンブカーが居眠り運転によってガードレールを突き破り、岩明を轢き殺すのだ。

対象の最後を見ることが出来る超能力。それが岩明の超能力だった。

「それって、本当なの？」

「たぶんね。今まで一回も外れたことないし。もっとも、自由自在に使えるわけじゃないけど」

この能力に気が付いたのは小学校に上がるか上がらないかと言った時分だった。突然頭の中にヴィジョンが浮かび、そのヴィジョン通りに物が壊れたり人が死んだりする現象が月に一度か二度起こり、十歳になるころには、それを現実として受け止めることができるようになった。

そして、一昨年の夏。自分が死ぬヴィジョンを見た。別にこれと言った心情の変化はなく、「ああ、やつとか」などと気の違ったと思えないことを思ったただけだった。

「っていうか、小学生のころ、お前が散々実験したんじゃないか。その時も、的中率百パーセントだっただろ」

「うん……」

藤井は、今にも泣きだしそうな表情で頷いた。唇は震えていて、

目には涙が溜まっている。岩明以上に、彼女は岩明の死を重く捉えていた。

その表情を見て、岩明は慌てて藤井の手をとった。

「なんてな、嘘だよ。じゃあなきや、一万円も払って参考書なんて買わないだろ？」

自分が死んでも、藤井はこうやって泣くのだからだろうか？ そう思うと少しだけ死ぬことに罪悪感を覚える。

「だからさ、勉強教えてくれよ」

ぎゅっと手を握る力を強めると、藤井はようやく笑った。

二日の時間が過ぎた。

岩明は教室の机に体重を預けながら、黒板の上の時計を眺め、藤井の到着を待っていた。普段は別々に友達と帰ることが多いのだが、今日はあの本屋で鈴音と会う約束をした日なので、二人は一緒に帰る約束をしていた。

「あの人、どうしてあんな死に方をするんだろ？」

自分以外誰もいない教室で、岩明は鈴音の終わり方を思い出していた。

真っ赤な劫火の中心に彼女はいた。

真っ黒な髪と、真っ黒なスーツには焦げ一つなく、白い顔には汗一つなく、彼女は燃やされていた。

一瞬で、灰に変わってしまった彼女。

なぜあんな地獄の業火に身を焼かれなければいけなかったのだらう？

あくまでも岩明が見ることができるのは物事の終わりであり、その過程は能力の範囲外であった。

「まったく、使い勝手が悪い力だよ。いつも突然頭の中にヴィジョンだけ与えて、それだけだ。なにもできやしない」

誰に文句をつけるべきか悩みながら、岩明は初めてヴィジョンを見た時のあの感覚を思い出す。何の前触れもない終わりの知らせは、恐怖以外の何物でもなかった。それでも、何度も見るうちに、岩明は慣れてしまった。最初はそんなのに慣れた自分にシヨックを隠せなかったが、それもじきになれてしまった。人間とは慣れる生物なんだなど、一人納得したことも良く覚えていて、そんなことをブツブツと思い返していると、

「遅れちゃった！ ごめんごめん」

藤井が早足で教室に入ってきた。遅れたことに文句でも言ってるのかと岩明は立ち上がる。

そして、

「……………うそだろ？」

なんとか、それだけを呟いた。

昨日まで何にも見えなかったのに。

「ど、どうしたの？ そんな顔して」

口と目を大きく開く岩明に、藤井がゆっくりと首を捻る。

その仕草に、岩明の足が震える。

死因は、恐らく腹部を刺されたことによる出血死。

凶器は、派手な何に使うのかすらわからないナイフ。

場所は、舗装されて間もないアスファルトの上。

時間は、二時間後。

それが、藤井加奈の終わり方。

「うそ、私、死ぬの？」

岩明の表情から、藤井が総てを悟るまで、そう時間はかからなかった。

「違う！」

慌てて岩明が藤井に駆け寄ろうとするが、藤井は岩明が進んだ分後ろに下がり、何も言わずに教室を出て行ってしまった。

「畜生！」

急いで岩明は藤井の後を追って走り始めた。

あれから一時間経過していた。藤井は見つかっていない。陸上部恐るべしと言えるだろう。時間が経てば経つほど搜索範囲は広がり、見つけづらくなる。もし電車やバスにでも乗られていたらお手あげだ。タイムリミットは後一時間しかないことを確認し、携帯を制服のポケットにしまう。真面目な藤井は携帯を学校に持っていったので、いくらかけても無駄だった。

「リミット？ 電話？」

見当違いなことを言っている。岩明は自嘲した。

自分の予知は絶対なのだ。こんなことをしても無駄だと言うことは分かっている。

なのに、なんで自分は無駄なことをしているんだろうか？

「よう！ 坊主。今日は嬢ちゃんと一緒じゃあないのかい？」

焦りとも困惑とも取れる感情が渦巻く頭を、気の抜けた男の声が叩いた。いつの間にか正面に立っていたのは、こないだの本屋の店主だった、手には様々な野菜が入ったエコバックを持っているところを見ると買い物帰りなのだろう。

「ええ、ちよつと」

今はこんな変なおっさんと談笑している場合ではないのだ。適当に言葉を濁して立ち去ろうとする岩明。

「なんだよ、連れないな。小野のバカが欠点として暇なんだよ、店来いよ。つてか、鈴音の奴も待つてるしさ」

「っ！！」

その一言で、岩明は走り始めた。

そうだそうだそうだった！ あの人なら、あの魔女なら、あの鈴音なら何かできるかもしれない。

そんな希望を持って。

「あらそうなの。大変そうね」
「そんな悠長な！」

こないだの本屋につき、レジに座り店番をする鈴音を見つけて事情を説明すると、帰って来たのはそんな台詞だった。目の印象通り冷たい一言に、理不尽だとわかっていても岩明は声を荒げずにはいられなかった。

「香奈の奴が死んじゃうんです。どうにかありませんか？ ぼく、なんでもしますから」
「なんでもって言われても、予知したのはあなたでしょう？」

たいする鈴音は、物分りの悪い子供にゆっくりと教える。

「自分で予知したならその責任は全てあなたの物なの。あなただけの責任なの。責任は自分で取るものなの」

穏やかに、鈴音はそう断言した。岩明にしてみればそれは死刑宣告に等しかった。

「……ぼくの予知は、絶対なんです。的中率百パーセントなんです。だから、助けてください」

今にも空気に溶けてしまいそうな声で、岩明は頭を下げた。ぼつぼつと、本屋のカウンターに水滴が落ちた。

「絶対？ 百パーセント？ だっさいな、確率なんて信じているのか？」

岩明の頭を、そんな言葉と優しい掌が撫でた。

「百パーセントってのは、百回やったら百回駄目だったっていう証明でしかねーよ。もう一回やってみる。変わるかもしれないぜ？十年に一人の逸材なんて毎年出てくるし、一万分の一のクジが当たるのはいつも一回目だ。統計なんて下らない、降水確率零パーセントで振る雨にこそ、感謝をささげようじゃあないか！」

頭をあげると、そこにいたのは店主だった。

にやにやと楽しそうに笑いながら、岩明に微笑む。

「お前さ、これで嬢ちゃんを助けられたら、最高にかっこいいぜ？」

無茶苦茶なことを、当たり前のように言う店主に岩明は思わず息を呑む。不思議と、何とかかなりそうな気がしてきた。店主の言葉には、何とも言えない力があつた。

「何それ？ 漫画の読み過ぎじゃないの？」

「が、鈴音はそこまで単純でないらしく、冷めた目で店主を見る。」「お前の台詞はそうじゃあないだろ？」

涙を拭く岩明から手を離し、カウンターに買い物してきた品を置いて、店主は鈴音に命令する。

「ほれ、教えてやれよ。嬢ちゃんの場合」

「はあ？ なんで私がただで教えないといけないの？」

「ただじゃあない、十万だ」

言われて、鈴音ははっとした。二日前、自分はなんと言ったんだろうか？

「まったく、本当、あなたには敵わないようね」
「魔女にそう言われるとは、光栄だ」

鈴音は諦めたように、指をすつと日の沈む方向に伸ばした。

「あつちよ。二十分も走れば追いつくから」
「ありがとうございます」

礼もそこそこに、岩明は走り出す。その背中はあるという間に夕焼けの町に消えて行った。

「まったく、やっぱりあなたの店に来るとロクなことがない」
「そう言うなって、俺は案外お前のこと好きなんだけどなー」

店主も来たし、十円の借りも返した鈴音はこんな所に長居したくないと言わんばかりに立ち上がる。

「店番の借りはいつか回収に来るから」
「はいよ。いつでも来てくれよ」

岩明は走っていた。全力疾走に近いスピードでもう何分走り続けたかわからない彼は、全身汗みずくで、肺も殆ど機能しているのかしていないのか、限界を軽く超えて走っていた。

二十分も走れば追いつくと言っていたが、あのドラクエの指示みたいなアドバイスでたどり着けるのだろうか？ もっとも、同じ超能力者としての感が、鈴音の予知が外れているという不安は岩明には一切なかった。

何よりも藤井の死のヴィジョンの風景に、このあたりはあまりに

も酷似していた。

開発に失敗して、入居者が半分にも満たないマンションが立ち並ぶ住宅街。平日の夕方だというのに他に人影はなく、刃物を持った変態がいつ出てもおかしくはなさそうな状況だった。

「く、そ。か、香奈ー！ 返事しろ！」

足がもつれる回数が増えてきた岩明が、声を上げた。予知からどれだけの時間が経ったかはもうわからないが、リミットは残りわずかだと思えた。

何度か藤井の名を叫ぶが、帰ってくるのは静寂か風の音ばかり。だが、それでも諦めるわけにはいかない。岩明は何度も何度も繰り返し名前を呼んだ。

そして、

「均？」

藤井の声が沈黙を破った。その見慣れた顔を電柱の後ろに確認して、岩明は胸をなでおろす。緊張が解けたことから一瞬足が崩れそうになったが、すぐに立て直して藤井の方に向かう。

「ごめん、私取り乱しちゃって、でも、私死にたくないよ？」

「大丈夫。とりあえず、ここはまずい、アスファルトはまずいんだ」

泣きながら走り寄ってきた藤井を抱きしめながら、岩明は来た道を思い返す。ちょっと前に公園を通り過ぎたはずだが、あれは何処だっただろうか？

「あすふあると？」

「ああ、お前が刺されるヴィジョンを見たのは、アスファルトの上

だったんだ。だから、刺されるまでにアスファルトじゃあない場所にいれば安全のはずなんだ」

腕の中の藤井の頭を撫でて、岩明は微笑みかける。

「ぼくは、雨を降らせたいんだ」

「どういうこと？」

「予知を変える。ぼくにはできるんだ」

「本当？」

「ああ」

根拠はないけど、本気で思っているんだ。

「さあ、確か来た道に公園があつたんだ。あそこなら地面は土だから大丈夫なはず……」

言葉を切つて、藤井を身体から離す。嫌な予感を首筋に感じ、その感覚に身体を任せて勢いよく振り向くと、視線の先には見知らぬ男が立っていた。

その男は野球帽に、身の丈よりも大きなシャツを着ていて、いかにもその辺をうろつく若者と言った感じであった。しかし、その服はどこどころほつれていて、山を下ったかのように汚れていた。身体もボロボロで、目も虚ろ。何日も食べていないような疲労しきつた男であった。ただ、両手には凶悪そうな、一体全体何に使うのかと問いただいたくなるナイフを持っていて、正体だけは一目で誰かわかってしまった。

こいつが、藤井の腹を刺す予定の男だ。

「っち」

男が問答無用で走り出したのを見て、岩明は舌打ちをした後、藤井の身体を押した。

「逃げて！ 大丈夫ぼくは、まだ死なないから」

走ってくる男を迎え撃つ技術なんて一切持ち合わせていないが、岩明には一つだけ考えがあった。

『死ぬ日付が決まっているから今日はまだ死なないはず』
そんな打算があった。

「均……！」

その言葉の意味が分かったのか、藤井は一瞬だけ何かを言おうとしたが、すぐさま背を向けて走り出した。予知を変える為に来たのに、予知を信じないといけないとは、何とも言えない皮肉だった。藤井が走り出した足音を聞いて、岩明はひとまず第一段階クリアとため息を……

「駄目じゃな。そこは、何が何でも二人一緒に戦うか逃げ出す方が、拙者の好みなんじゃが」

吐こうとした瞬間、新たな人物の声が耳朶を打った。

目の前に迫る男だけでも精一杯なのに、新たな人物が登場するのはあまり嬉しい展開ではない。

そんな心情を読んだのか、

「安心せい、拙者はその男を追ってるもんじゃ」

新たな声は悠々と歩いて岩明の隣に立った。

あまり、背の高くない和装の男だった。黒い散切り頭に、愛嬌の

残る顔立ち。肩には何故かギターケースをしょっている。

男の名前は、多鞘関守と言った。

「まったく。国は何をしとるんじゃ。あんな男を逃がしてしまつて」

その関守は一切の危機感なしに、ナイフを振り回して近づいてくる男に構えを取る。中国形意拳の言う『三才式』の構えであつた。全く持つて和装もギターケースも関係のない構えである。

が、その錬度は相当なものであつた。もはや、日常では意味をなさないレベルまで鍛え上げられた構えは、素人である岩明と藤井にすら敬意を抱かせた。

そして繰り出される拳は火の意味を持つた拳。『金』属たるナイフを滅ぼす、火剋金の炮拳であつた。

関守の足が大地を踏みしめ、目の前に迫つた男にその一撃を放つ！

「ありがとうございます」

地に臥すナイフ男の手足を縛る関守に、岩明と藤井がそろつて頭を下げる。

関守はその二人に一瞥ずつくれた後、静かに首を振つた。

「なーに、気にするな。拙者の仕事と、愛しい魔女の頼みが重なつただけじゃ」

「魔女つて、あのおねーさんですか」

「そのお姉さんじゃ」

あまりにいい加減な返しに、絶対に会話が通じていないとしか藤

井には思えなかった。が、岩明は気にせず何度でも何度も頭を下げた。

「拙者への礼より、彼女にかける言葉があるんじゃないのか？」

あまりに親切に礼を言われると、かえって悪い気になるものだ。

関守はナイフ男を担ぐと、さっさとどっかに消えてしまった。職質されたらどうする気なのだろうか？

その遠ざかる影を見送って、二人は静かなゴーストタウンで二人っきりとなった。

この沈黙をどう変えようか、うるんだ彼女をどう慰めようか。しばらく考えた後、岩明ははっきりとこう言った。

「勉強、教えてくれよ」

「は？」

「だって、受験生なんだから？」

(後書き)

感想と、他の作品を読んでくれると励みになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2183o/>

シュレディンガー

2010年10月9日23時47分発行